

長唄「松の翁」 松永家から植松家へ

本稿は、東海道原宿の素封家植松家から発見された長唄「松の翁」唄本とその経緯が記された奥書、並びに植松家（第13世当主・植松清博氏）に残る芳名帳「吟海草帖」の書付内容から、長唄「松の翁」は本市平垣に所在した松永家に由来するものである……というこれまでの定説が覆るに至った経緯をまとめたものです。なお前段は富士山かぐや姫ミュージアム館長の本ノ内義昭が執筆し、後段は沼津市在住の長唄囃子方としてご活躍されている堅田喜代先生が寄稿されたものです。



東海道きっての名園といわれた帯笑園の現況(平成24年9月、国登録記念物(名勝地関係)となる)



富士市指定文化財 旧松永家住宅(書院部分現況)昭和57年3月富士市広見公園歴史ゾーンへ移築復原

長唄「松の翁」は本市平垣の松永家ではなく、

沼津市原の植松家にて創作！

富士山かぐや姫ミュージアム館長 木ノ内義昭

江戸時代から昭和初期にかけて沼津市原（東海道原宿）の素封家として名を馳せてきた植松家につきましては余人の知るところですが、昨春、同家の第十三世・植松靖博氏が同家に伝わる文書を何点か携えて来館されました。



往時の植松家の庭園（帯笑園）

因みに植松家には珍しい園芸植物のコレクションや盆栽を主体とする「帯笑園」と呼ば

れる庭園があり、庭の中心には往時は「望嶽亭」と命名されたあづま屋も備えられており、東海道を往来する諸侯・貴人をはじめ、文人墨客から庶民に至るまで庭園の素晴らしさを称賛しています。

さて、植松氏がお持ちになった文書の内2点について紹介させていただきます。まず1点目（植松家資料1）ですが、「新曲 松の翁」と命名された唄本とその奥書です。その内容ですが、幕末から明治前期にかけて長唄三味線方として名を馳せた三代目杵屋正次郎が植松家を訪れ、同家の主人や「帯笑園」に感動し、長唄界では御祝儀曲として現在でもよく上演されている「松の翁」を植松家逗留中に創作し、併せてその経緯も正次郎の直筆で記したものです。

その経緯の詳細につきましては、植松靖博氏が昨年5月11日の沼津朝日、6月26日の毎日新聞朝刊の静岡版、8月11日の静岡新聞夕刊に寄稿されており、併せて毎日新聞の電子版（6月7日）等でも紹介されてます。

なお、唄本の前段に書かれていた「松の翁」歌詞の部分は広く知られているものとほぼ同様です。歌詞の末尾には明治十五年水無月中旬とあります。

植松氏の持参した2点目の資料（植松家資料2）は帯笑園に来訪された方の芳名帳で「唸海草帖」と記されており、植松氏によれば「唸海草帖」は35冊残されており、その内の11冊目に三代目杵屋正次郎の書付があったそうです。その内容ですが、伊勢～西京への旅行の途次、明治10年6月中旬頃に植松家に逗留したが、嬉しさのあまり「松の翁」を作詞し、三味線で弾いてみた旨の書付です。

ところで、当ミュージアムの所在する広見公園内の歴史ゾーンには、移築復原された横沢古墳や、復元された古代の高床倉庫や堅穴住居と共に、県指定文化財の旧稲垣家住宅をはじめとした文化財建造物8棟（内6棟は市指定）が移築復原され、県内屈指の民家園（歴史公園）として親しまれて

おりますが、中でも、武家風様式を取り入れた格式高い書院と薬医門で構成された市指定文化財・旧松永家住宅（松永本家の書院部分）はひと際目を惹きます。

実は、この文書が発見されるまでは、「松の翁」はこの松永家で創作されたとされ、長唄界では定説となっておりました。以下、松永家について概要を記しておきます。

松永家は江戸時代より市内平垣に居を構え、幕末の天保7年（1836）には旗本日向小伝太から陣屋詰役人として知行地の差配を命じられ、財力を蓄えていきます。邸内には小塚陣屋が併設され、



明治時代の松永家の庭園（平安亭消日園）

富士郡下屈指の豪農・素封家に成長し、慶應元年（1865）の江戸幕府第14代将軍・徳川家茂の上洛や、明治元年（1868）の明治天皇東京行幸の際には小休所に指定されております。松永家の豪邸には「平安亭消日園」と名付けられた庭園があり、富士山を借景とした名園として知られており、各界の著名人が度々訪れていたことは想像に難くありません。

因みに、松永家に関する記録や資料については、現在、当館並びに富士市立中央図書館で分散管理しております。今

回の植松家で新たに発見された文書等により、「松の翁」は植松家に関わるものであることは確定されましたが、はたして三代目杵屋正次郎や「松の翁」と松永家との間に接点はないものかと、調査してみました。併せて、当館へ寄贈されている松永分家に伝わる記録等についても確認しましたが、三代目杵屋正次郎の来訪・逗留に関する記録や「松の翁」に関係のありそうな資料は見つかりませんでした。加えて松永家において、長唄等が催された記録や、長唄に関する資料についても見出せませんでした。

按ずるに、松永家も植松家も共に名字に「松」の一字が使われており、且つ邸宅は共に東海道を面しており、更に共に遠く富士山を仰ぎながら名園を愛でる事ができる環境を有しています。加えて松永家の系図を注釈した「松永家記録」によれば明治時代には植松家と松永家は姻戚関係にあることから、三代目杵屋正次郎の没後どこかで情報が錯綜し、このような謬錯が生じたのでしょうか。

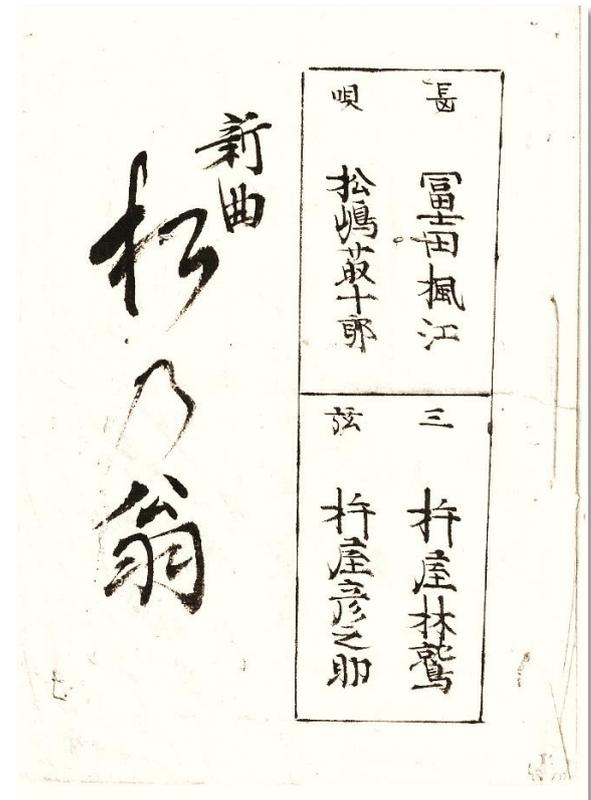
一方で、松永本家の所在した富士南麓（岳南地域）ですが、当市鷹岡において中央の大資本を拠所に富士製紙（株）第1工場が明治23年1月に操業を開始し、それ以降、数多の製紙会社が設立され、国内有数の紙都の様相を呈してまいります。これに連動するように、宿泊・遊興・娯楽施設等も整備され、岳南地域は活況に呈するようになりました。当然のように旧吉原宿を中心に芸事も盛んになります。

やや遅れますが、大正9年には、渋沢栄一が当市鈴川に於ける産業大会での講演の際、松永安彦氏邸（松永本家）に泊している（『竜門雑誌』第384号 大正9年5月）ことから、松永本家は早い段階で高級旅館的な機能を有していたことが推察されます。このような背景が「松の翁」＝松永家と流布される遠因になったのかもしれない。

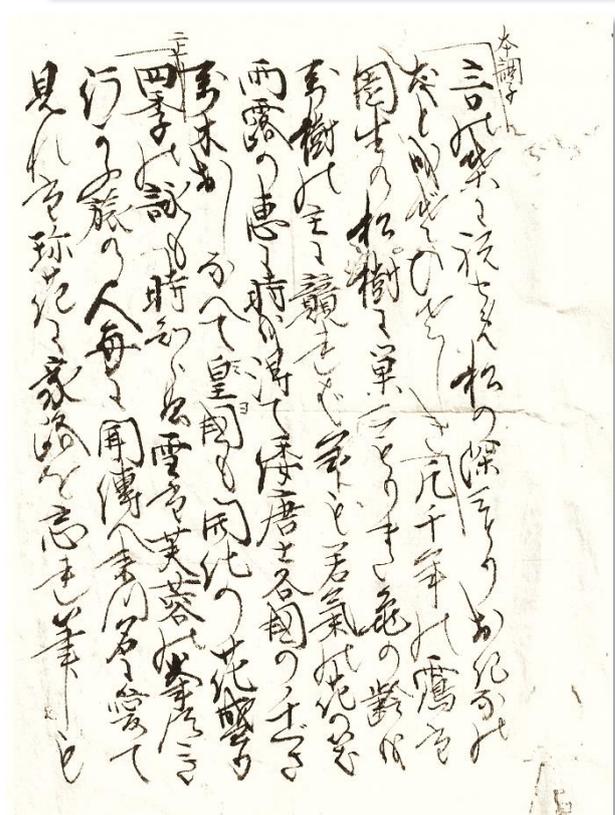
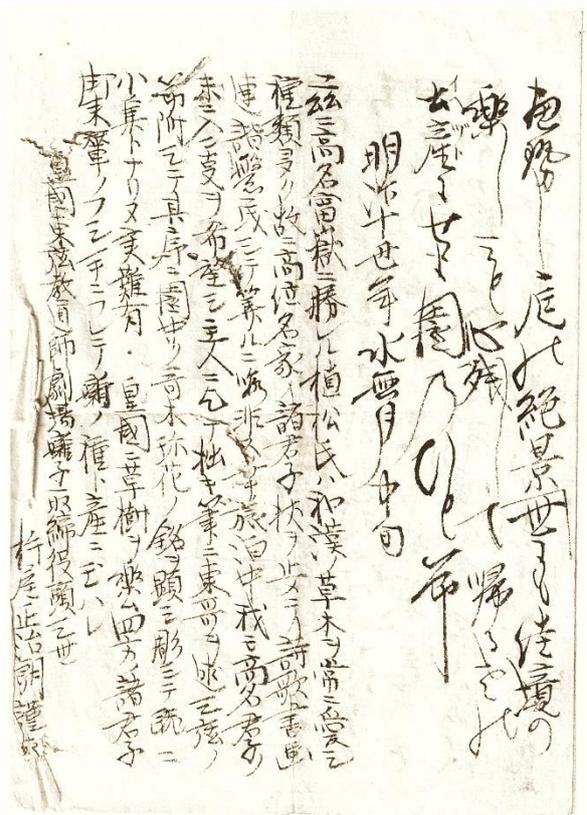
因みに、松永本家の書院は昭和18年に割烹旅館・白妙荘に姿を替えております。

実は、いつの日か旧松永家住宅を会場に「松の翁」が上演できればと、数年前から関係者に声掛けをしてきたところでしたが、今回の発見を機に考え直したところです。

※沼津市（旧原宿）の植松家 第十三世・植松靖博氏所蔵文書（写真・翻刻）



植松家資料1 「新曲 松の翁」と命名された唄本とその奥書



植松家資料2は帯笑園に來訪された方の芳名帳で「吟海草帖」第十一

明らうと流るとも勢水無月
 ありと伊勢系言より西京へ
 越せし心も雨煙を伴ひ旅の
 驛路すづねる響ききききき
 青樹長者松松君へ枝か止久
 ありし心弦も身を信しと情は
 余り愚業もくも花園に聊文章
 ありし心もくも見真似の猿智恵は
 松さ業や元も元本もくも元那の
 念もくもく睡ひのりもくもく
 免し玉くれ

東京劇場藤子取締役頭
 大伴謡柳大産摩長唄云彦師
 一五 竹屋正治朗赤井
 劇場長唄 松嶋取十郎
 劇場云弦 竹屋彦之助



ちよとい叫ぶ園中しる
 暮山嶽の聲もくも
 針松乃松
 見女いし
 東京浅草金亀山小蔵
 諸名云旬林就寫

植松家資料1 長唄「松の翁」の唄本原稿と経緯書付

長 富士田楓江 三 杵屋林鷺
唄 松嶋藤十郎 弦 杵屋彦之助

新曲
松乃翁

本調子
言の葉に祝せめ松の深みどり おきな
の友と成ぞひさしき 凡千年の鶴は
園生の松樹に巣こもり また 亀の齡を
萬樹の主に競れば 年も若氣の花の笑
雨露の恵に時を得て 倭唐土各国の千ぐさ
萬木おしなへて 皇国も開化の花盛り
ニ上り
四季の詠も時知らぬ 雪は芙蓉の峯続き
行かふ旅の人毎に 聞傳へ来つ名に愛て
見れば珍花に家路を忘れ 筆も
尽せし庭の絶景 世にも佳境の
楽しみと 心残して帰るさの
土産いへつにせよ 園乃ひと節

明治十丑年水無月中旬

茲ニ高名富嶽ニ勝レル植松氏ハ 和漢ノ草木ヲ常ニ愛シ
種類ヲク 故ニ高位名家ノ諸君子杖ヲ止メテ 詩歌書画
連諧繁茂シテ 算ルニ暇非ス 幸旅泊中 我モ高名君子ノ
末ニ入ニ更ヲ希望シ 主人ニ乞テ拙キ筆ニ東哥ヲ述三弦ノ
節附シテ其序ニ 園中ノ奇木珍花ノ銘ヲ顯シ彫シテ 既ニ
小集トナリヌ 実難有 皇国ニ草樹ヲ樂ム四方ノ諸君子
御来輦ノフシノ手ニフレテ離ノ種ト産ニ玉ハレ
皇国東弦教通師劇場離子取締役頭三世
杵屋正治朗謹述

記載資料2 「吟海草帖」(芳名帳)

明らかに治ると、勢水無月
なかば伊勢参宮より西京へ
趣ばやと門葉両網を伴ひ旅行の
驛路すが羅の名に響きわたる
萬樹長者植松君へ杖を止め
おもわず三弦二興を催しいと嬉しさの
余り愚案なからも花園の聊文章
書ちらすミよふ見真似ハ猿智恵の
拙き業や毛も三本たらぬ三筋の
糸かけて唯ひつかき廻すを
免じ玉われ

東京劇場離子取締役頭
大倭謡抑大薩摩長唄三弦師
三世 杵屋正治朗赤拝
劇場長唄 松嶋藤十郎
劇場三絃 杵屋彦之助

御笑ひ州に園中より
荅嶽を望ミテ
鉢植の松より
見越すふじの峯
東京浅草金亀山の麓
諧名三代目林鷺

※翻刻にあたっては東京都立産業技術高等専門学校名誉教授・菊池邦彦先生に校閲していただきました。

また、本レポートの作成に際して植松靖博様に御教授・御鞭撻をいただきました。記して感謝申し上げます。

次に、沼津市に在住しながら、長唄離子方として中央でご活躍の堅田喜代先生が、植松家発見の「松の翁」の研究、並びに幕末に帯笑園に訪れた杵屋作十郎が創作したとされる長唄「駿河土産」の復元に向けてまとめられた調査研究レポート「帯笑園における音の遺産」を掲載します。

なお、同レポートは、堅田喜代先生が代表を務める「プロジェクト 松翁」により、令和3年11月3日、沼津御用邸記念公園東付属邸において開催された長唄の公演会「百四十年の時を経て 長唄珠玉の名曲が、開曲の地沼津に蘇る -三世杵屋正次郎唄本発見特別公演-松の翁」の当日配布の小冊子に掲載されたものとほぼ同じ内容です。

帯笑園における音の遺産

レポート文…堅田喜代

はじめに

2020年10月18日、沼津市原の「帯笑園」に於いて、NPO 沼津文化協会主催「まちなかコンサート」が開催されました。長唄囃子(和の打楽器)を専門とする私は、箏曲家 渡邊富鳳先生の演目に小鼓で参加しました。その折「駿河土産」と書かれた古い長唄の唄本コピーを先生から託されました。聞けば、帯笑園の植松本家13代目当主植松靖博氏から預かったとのこと。40年以上長唄界に居る私も全く聞いたことのない曲名でしたが、地元庭園を詠み込んであることと、植松氏の熱意に共感した私は、氏の依頼に応じ、復曲の実現に向けて動き出しました。その数ヶ月後、更にもう一曲の唄本「松の翁」を発見したとの連絡。この曲は近代長唄の中でも大変人気の高い名曲で、開曲の地が沼津だということは埋もれていた事実です。この2曲を通して、知られざる帯笑園の魅力を、正しく伝えたい一念でレポートを書きました。素人の文章ですが、今後皆様のご指導頂ければ幸甚です。

帯笑園

旧東海道に面した沼津市原の帯笑園は、素封家植松家が江戸時代から昭和初期まで代々伝えた庭園です⁽¹⁾。盆栽や鉢物、花壇に植えられた園芸植物の多様なコレクションは、他に類を見ないもので、かのフィリップ・F・フォン・シーボルトは、著書『江戸参府紀行』の中で「今まで日本にて見たるものの中に最も美しく豊かなるものなり」と讃えています。また植物園としての価値だけでなく、東海道を行き交う様々な階層の旅行者が訪れ、書や文芸を楽しみ、東西文化交流の場として際立つ庭園であった証としての貴重な資料も、多数残っています。

その中から、昨年、百年以上前の長唄唄本が2冊発見されました。どちらも長唄の歴史に残る名人の作で、新しい事実の判明に繋がる非常に貴重な資料です。長い間、文化の社交場として帯笑園が抱えてきたもの、その多様性には畏敬の念を覚えるばかりです。

唄本 ①

「駿河土産」文久3年(1863)亥年11月

長唄 富士田千蔵⁽²⁾、坂田仙八

三味線 杵屋作十郎⁽³⁾、杵屋六太郎

この唄の歌詞には、帯笑園に植えられた松七種や蘇鉄六種など珍しい植物の名前や、園から見上げる富士の絶景などが詠み込まれていて、杵屋作十郎が作詞、作曲を担当したと思われます。三味線の調子(4回も調子替え)や合の手(間奏)の挿入指示はありますが、曲は現存していません。

作曲年の文久3年は第57回島田大祭の当年で、大井神社の神殿改築の記念すべき年でもあったので、大勢の長唄芸人衆が参加したのですが、3日目神輿渡御の日に大雨となり、皆が足止めされたそうです⁽⁴⁾。唄本の年月から察すると、島田からの帰路、帯笑園に立ち寄り作

曲に至った…と考えられます。ここで特筆すべきは杵屋六太郎です。この名前は、六太郎→長次郎→六三郎→六翁と続く長唄界屈指の三味線方の名跡で、此処に名を連ねる六太郎が、その後家元八世六三郎になった方です⁽⁵⁾

おそらくこの方の存在も、後の長唄人の来訪に大きく影響したと考えられます。

唄本 ②

「松の翁」明治10年(1877) 丑年6月

長唄 富士田楓江⁽⁶⁾、松嶋藤十郎

三味線 杵屋林鷺⁽⁷⁾、杵屋彦之助

この曲は、東京から伊勢、京都への旅の途次、駿河原宿に宿泊した長唄の一行が帯笑園に立ち寄った折、その庭園の千草万木や、富士山の眺めの素晴らしさを詠み、三世杵屋正次郎(林鷺)⁽⁸⁾が自ら作詞・作曲したもので、短く極めて品が良く、唄い所、三味線の聞かせ所、また後に付けられた小鼓の手の妙技有り、と、今もご祝儀曲として盛んに演奏される大変人気の高い名曲です。

今回の発見では、直筆原本(後書きと署名付き)だけでなく、吟海草帖という芳名録も見つかっていて、そこには正次郎⁽⁹⁾直筆で

……萬樹長者植松君へ杖を止め
おもはず三弦に興を催しいと嬉しさの
余り愚案ながらも花園の聊文章
書ちらす……
東京劇場囃子取締役頭

大倭謡物大薩摩長唄三弦師

三世 杵屋正治朗赤拜

劇場長唄 松嶋庄十郎

劇場三弦 杵屋彦之助

と明記されており、「松の翁」を植松本家の「帯笑園」で作曲したときの様子が書かれています。

曲中の“萬樹の主”は植松家当主、“庭の絶景〜”と唄われているのは、沼津市原の「帯笑園」まさしくこの庭なのです。

富士松永邸の庭で作曲されたという説⁽¹⁰⁾も多く伝えられてきましたが、当時の8代目当主植松与右衛門季敬の妻は平垣村松永安兵衛の娘みちであり⁽¹¹⁾、その当時、両家の行き来が頻繁であったことに起因していると推察されます。

あとがき

今回、この2曲の原本によって、帯笑園が有形のものだけでなく、音楽という無形の遺産も残っていた事実を明らかにすることができました。そして唄本だけが残る「駿河土産」に関しては、東都長唄音楽池之端派家元十三世杵屋六三郎師が復曲して下さることになりました

た。150年近く眠っていた資料が、三味線の音に生まれ変わる訳です。植松家8代目当主の日記には、「駿河土産」の10年程前、岡安喜太郎⁽¹²⁾が帯笑園で長唄を唄ったという記述⁽¹³⁾、そして文久3年の「駿河土産」、14年後の「松の翁」と、おそらく長唄界の中で長年この園の噂は語られており、三世正次郎があの名曲を書き下ろしたことも、ある意味必然だったのでしょう。しかし私は「松の翁」の最後の歌詞や後書きに書かれている「土産」という言葉に正次郎の類稀なセンスを感じます。長唄の歌詞には掛詞が多く使われます。正次郎にとって「駿河土産」は、同じ場所で先人が作った置土産であり、そして「松の翁」もまた、この地を訪れる旅人や後世の私達への土産であったに違いないと思うのです。

この土産は、帯笑園に残る生きた音として後世に伝えていかななくてはなりません。それが今を生きる私達の使命です。過去に訪れた先人達を思い、帯笑園の庭でこの2曲が聴ける日を、切に願うばかりです。

感謝

この資料を大切に保管管理して下さった植松家代々のご当主様、庭園を守って下さった沼津市及び保存会の皆様、原本の価値を教えて下さった長唄研究の第一人者 稀音家義丸先生、様々な資料や文献の解説をして下さった研究者の羽山裕氏、復曲を引き受けて下さった十三世杵屋六三郎師、そして関わって下さったすべての皆様に衷心より感謝申し上げます。

註釈

- (1)…平成24年9月19日国の登録記念物(名勝地関係)として文化財登録。現在は沼津市が敷地を取得。
- (2)…ふじたせんぞう。三世。
- (3)…きねやさくじゅうろう。四世か？
- (4)…「日本三奇祭 島田大祭 帯まつり - 『大井川と嶋田宿』」
<https://www.facebook.com/simada.taisai/videos/940345386112789/?vh=e> (2021年3月29日閲覧)
- (5)…六三郎の名跡は享保から記録があり、江戸風長唄の基礎を作り、代々名人を輩出。現存する長唄の名曲を数多く作曲している。
- (6)…ふじたふうこう。富士田吉治の俳名。晩年藤枝に住んだ、三世富士田千蔵か？
- (7)…きねやりんしゅう。三世杵屋正次郎の俳名。
- (8)…1826～895、作曲の名手と言われ「正次郎連獅子」「元禄花見踊」「鏡獅子」など歌舞伎の演目としても有名な曲を多く今に残している。
- (9)…三世正次郎は、1878年正治郎と正式に改名。尚、園の資料には、正治朗と書かれている。
- (10)…浅川玉兔(1956)より
- (11)…小野佐和子(1997、pp57-66)
- (12)…二世岡安喜三郎の門弟。後名三世松永忠五郎。
- (13)…小野佐和子(1997、pp45-55)

資料提供

植松靖博、帯笑園保存会、羽山裕

資料解説

稀音家義丸、羽山裕

参考文献

- 浅川玉兔『長唄名曲要説』(1956/邦楽社)
 渥美清太郎『名曲解題邦楽舞踊辞典』(1938/富山房)
 小野佐和子「駿河原宿植松家の帯笑園」日本造園学会誌編『ランドスケープ研究』第59巻5号、pp9-12
 (1996/社団法人日本造園学会)
 小野佐和子「駿河原宿帯笑園の訪問者についてⅠー東海道を往来する人々ー」『千葉大学園芸学部学術報告』第51巻、pp45-55 (1997)
 小野佐和子「駿河原宿帯笑園の訪問者についてⅡー宿内とその周辺からの訪問者ー」『千葉大学園芸学部学術報告』第51巻、pp57-66 (1997)
 中内蝶二・田村西男『日本音曲全集 長唄全集下巻』(1928/日本音曲全集刊行会)
 日本舞踊社編『日本舞踊全集』(1982/日本舞踊社)
 町田嘉章『杵屋正次郎の代々』(1959/芳村家元) _

堅田喜代

1960年、沼津市に生まれ育つ。

富士の大自然に包まれて、幼少期より日舞、小唄、三味線、囃子、と、芸事三昧の日々を過ごす。6歳で花柳唸師、10歳から竹枝せん男師、そして、運命の12歳、「祭りの花笠」を踊った際、当時、鬼四郎と呼ばれた、堅田喜四郎師に声を掛けられたのを機に、文字通り鬼師匠の下、囃子の道を志すこととなる。

1982年、東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業

1983年、堅田喜代を拝名

1995年、師の逝去により、金沢西検番の指導を継ぐ

以後、邦楽囃子方として、古典を中心とした演奏活動をする傍ら、各地の稽古場にて後進の育成にめている。

邦楽囃子新の会会員。

鼓調会主宰。

長唄協会会員。

令和4年3月31日発行
編集・発行 富士山かぐや姫ミュージアム(富士市立博物館)
著者 木ノ内義昭・堅田喜代
〒416-0061 静岡県富士市伝法 66-2
電話 0545-21-3380